

精製し mp 149-152° の無色針晶を得た。これは TLC, 赤外線吸収スペクトル (IR), 核磁気共鳴吸収 (NMR) の検討の結果 *morrisonide pentaacetate* と推測され、実際に標品との混融, IR の比較により同定された。

*morrisonide* は三橋らにより *kingiside* と共にキンギンボクより初めて単離され<sup>1)</sup> その後、スイカズラ、サンシユ<sup>4)</sup>、ハルリンドウ<sup>5)</sup>、オトコエシ<sup>6)</sup> 等にも含まれている事が報告され、さらに又井上等によりその立体構造や生成成に関して検討され<sup>7)</sup>、イリドイド配糖体では分布が広いものと思われる。レンプクソウより *morrisonide* が単離された事は、前記の科と近縁である事の一つの証明と思われる。

実験の部 1970年5月埼玉県飯能市附近で採集したレンプクソウの全草 1.2 kg をミキサーにて粉砕してメタノール 3 l にて2週間冷浸する。抽出液を減圧濃縮して、50g のメタノールエキスを得た。これに再び水を加え不溶物を沓別し、水層を減圧濃縮して 40 g のエキスを得た。これを活性炭 200 g を用いてカラムクロマトグラフィーを行ない、水にて糖部を溶出させた後、吸着部をメタノールにて溶出させ、溶出液を減圧濃縮し 3 g の粗配糖体部を得た。これを 70 g のシリカゲルを吸着剤としてカラムクロマトグラフィーに付し  $\text{CHCl}_3$ -MeOH の系を用い順次 MeOH の濃度を高めながら展開し、3-3.5% MeOH- $\text{CHCl}_3$  より溶出してくる部分 70 mg を得た。これを常法通りピリジン、無水酢酸にてアセチル化し、プレパラチブ TLC (溶媒系: ベンゼン, エーテル=1:1, 厚さ: 0.75 mm, plate: HF<sup>254</sup>) 4 枚にて精製し、アルコールから再結晶し 63 mg の無色針晶を得た。mp 149-152。標品の *morrisonide pentaacetate* と混融, IR で一致した。

なお材料の採集に御便宜下さいました当研究所 佐々木一郎氏に深謝いたします。

文献 1) I. Souzu and H. Mitsuhashi: *Tetrahedron Letters* 2347 (1969). 2) H. Inouye, S. Saito, H. Taguchi and T. Endo: *Tetrahedron Letters* 2347 (1969). 3) J. H. Wieffering: *Phytochemistry* 1053 (1966). 4) 遠藤 徹, 田口平八郎: *薬学雑誌* 93: 30 (1973). 5) 井上博之, 中村有伸: *薬学雑誌* 91: 755 (1971). 6) 田口平八郎, 横川ゆり子, 遠藤 徹: *薬学雑誌* 93: 607 (1973). 7) H. Inouye, S. Tobita, Y. Akiyama, K. Ito and T. Shingu: *Chem. Pharm. Bull.* 21: 846 (1973). (津村研究所)

□植物学報 中国植物学会の雑誌, 植物学報 15 卷 1 号が復刊された。蔣英氏がガガイモ科とトウダイグサ科の新属をわいている。またヒマラヤのチベット側や雲南の第 3 紀末の植物化石の中で、現在ヒマラヤの常緑広葉樹林の一つを代表する *Quercus semicarpifolia* が発見されたことは、植物地理上面白い報告である。最近、中国高等植物図鑑の出版など研究が活発になっていたが、本格的な論文が発表されるようになったのは喜ばしい。(山崎 敬)